中世哲学の万華鏡

山本　芳久

私が初めて宮本先生の謦咳に接したのは、一九九三年のことであった。キリスト教と哲学という二つのものに関心を抱きながら進学した東大本郷の文学部には中世哲学に関する講義は存在しなかったので、駒場の比較文学比較文化研究室に所属しておられた宮本先生の大学院の演習に参加させていただいたのがきっかけだった。それ以来、十年近くにわたって、一年も休まずに演習に参加した。演習では、主に、教父関係の著作の講読が行われた。ニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』『雅歌講話』やアウグスティヌスの『告白』などを丹念に読みつつも、ときに脱線しつつ展開される先生の哲学的解釈から、私は大きな示唆を受けた。

そのなかでも、最も印象的だったのは、学部の三年・四年の二年間で講読したニュッサのグレゴリオス（三三〇頃―三九〇頃）の『モーセの生涯』であった。その授業には、現在はシリア学者として一家を成しておられる高橋英海氏、グレゴリオスを専門としていた手塚奈々子氏、プラトン研究者の高橋雅人氏などの錚々たる先輩方も出席しており、ギリシア語講読の厳密さといい、内容に関する議論といい、極めてレベルの高いものであった。

学部生であった私は、ギリシア語に関しても、哲学的な議論に関しても、理解の及ばない点が多かったが、授業から受けた刺激は、ラテン語やギリシア語の読解力が身についてからの講読と比べても、より大きなものがあった。私に感銘を与えていたのは、宮本先生の解釈の「新しさ」であった。グレゴリオスに関する先行研究など全く知らなかった当時の私にとって、その「新しさ」とは、先行研究との比較の中から浮かび上がってくるような種類の「新しさ」ではなかった。そうではなく、遙か昔に遠い場所で執筆された、一見自分とは何の関係もないように見える古典のテクストが、先生の先鋭な問題意識のもとに照らし出されることによって、今ここに生きている自分の人生の視界を照らし出す生命に満ちたかけがえのない言葉の宝に変容し、現代的なものとして甦ってくるという意味での「新し

さ」であった。

周知のように、『モーセの生涯』は、旧約聖書の「出エジプト記」を素材としつつ、エジプトにおける苦難からヘブライ人を導き出したモーセをモデルとして、苦難に満ちたこの世を生き抜く徳・力量（アレテー）の形成の道行きを語り明かした書物である。哲学の古典を原典で丹念に読解するという極めて地味ないとなみが、いまここで様々な苦難に直面しながら生きる自分を支え導く力になりうるということを、この書物の講読に毎週参加しながら、ありありと痛感させられる二年間であった。哲学研究に志しながらも、進むべき方向についての具体的な手がかりを得ることのできていなかった当時の私にとって、二年間かけた講読の末、一冊の古典を読み終え、古典研究の意義についての生き生きとした手応えを得ることができたとき、「出エジプト」を主題としたこの一古典の講読は、いまここで進むべき方向を手探りしつつ迷いながら一歩一歩歩んでいる私自身の「出エジプト（エクソダス）」にほかならなかったということを痛感した。自らがようやく古典研究・哲学探究の歩みの出発点に立ちえたことの実感を噛み締めていた。

また、現在の時点から回顧して興味深いのは、「出エジプト記」3章14節おいてモーセに開示される「在りて在るもの」という有名な神の名をめぐって、後に「ハヤトロギア」「エヒイェロギア」という仕方で本格的に展開されていくこととなる先生の思索の萌芽のようなものが、解説のなかで語り明かされていたという事実である。אֶהְיֶה אֲשֶׁר אֶהְיֶה（ehyeh asher ehyeh）というヘブライ語における神の名が、ギリシア語に訳されると ἐγώ εἰμι ὁ ὤν となり、更にラテン語では ego sum qui sum と訳され、次第に動的性格が希薄になるが、我々は、ヘブライ語における原点に立ち戻ることによって、硬直化した西洋の神学を克服していく必要があるという解説であった。その説明を耳にしながら、当時の私は、極めて興味深い脱線的な説明というくらいにしか受け取っておらず、まさか先生がこのテーマを徹底的に掘り下げて、以後いくつもの書物を書き上げていくことになるとは考えもしなかった。当時の私にとっては、先生はもう既に完成した哲学者であり、先生もまた未完成なままに一歩一歩手探りしながら歩んでいる存在だという観点が希薄だったのである。

トマス研究から出発した宮本先生は、カナダ、イスラエル、フランスへの長期にわたる留学のなかで、旧約聖

書、新約聖書、教父学、フランス現代思想まで守備範囲を広げ、帰国後二十年ほどを経て、極めて独特な「ハヤトロギア」「エヒイェロギア」を大胆に展開し始めた。先生が近年展開しておられる思索は、通常の意味でのトマス研究でないことは言うまでもない。だが、だからといって、先生の哲学探究の原点であるトマス・アクィナスの精神から離れてしまったのではないと思う。先生は、トマスの述べたことを追い求めようとしてきたのではなく、トマス自身が追い求めていたものを、自らもまた追い求めようとしてきたのだ。そのことは、トマス哲学の中心原理が、「自存する存在そのもの（ipsum esse subsistens）」として神を捉える観点にあり、それが、まさに宮本先生の「エヒイェロギア」と同じ「出エジプト記」3章14節から示唆を受けたものであることからも裏付けることができるだろう。トマスに代表される伝統的な神学から深い示唆を受けつつも、そこに安住することなく、時空を横断した様々なテクストとの対話のなかで先生は常に新たな視界を開示し続けてきた。それは、領域横断的な知のなかに位置づけなおすことによって伝統的神学に新たな生命を与えなおすいとなみとも言えれば、逆に、我が国においては一般的に取り上げられることの少ない神学や中世哲学を援用することによって、我が国における哲学的な知に新たな息吹を吹き込む活動でもあったと言えよう。

そして、実は、このような仕方で異質な知をダイナミックに統合していくという在り方自体が、トマスに代表されるスコラ哲学の根本精神そのものであった。宮本先生は、トマスから、細かい枝葉末節の議論を学んだというよりは、そのような根本精神を学び取ったのである。

スコラ哲学は、しばしば、閉ざされた知の代表的なものとして揶揄されてきた。日本語の辞書においても、「スコラ的」という言葉をひくと、「細かい事柄について、無用でわずらわしい議論をするさま」（大辞泉）などとネガティブな仕方で形容されていることが多い。キリスト教の教義を前提にしながら、部外者にとってはどうでもよい議論を細かく展開する不毛ないとなみの代表的なものとして批判されるのである。スコラ哲学とは、一本の針の上で何人の天使が踊ることができるのかといった荒唐無稽な問いに取り組んでいたのだというような根拠薄弱な揶揄が為されることさえある。

スコラ哲学について或る程度の知識を有している人であ

れば、このような評価に対して同意する人は皆無に近いであろう。スコラ哲学とは、古代ギリシア哲学とキリスト教という異質なものの緊張感に満ちた統合に取り組んだものである。また、周知のように、アリストテレスに代表されるギリシア哲学のテクストは、十二世紀以来、イスラーム世界を経由してラテン・キリスト教世界に導入された。スコラ哲学は、閉鎖的な知の体系であるどころか、むしろ、開かれた土俵において生まれた、開かれた知の体系なのである。

このような在り方をしたスコラ哲学を現代において創造的な仕方で生かしなおすためには、単に、トマス・アクィナスやドゥンス・スコトゥスといった一人一人のスコラ哲学者の思想を客観的に明らかにするにとどまることはできないであろう。そのような態度は、開かれたスコラ的な知を、閉ざされた自己完結的な体系として取り扱い、スコラ的な知が有している潜在的な可能性を埋もれさせてしまうことにつながってしまうからである。

スコラ哲学を現代において生かしなおすとは、中世スコラ哲学という知の要塞に閉じこもって、その高みから近代以降の知を批判したりすることではない。そうではなく、「異質な知の統合」というスコラ的な知の精神を受け継いで、近代以降の異質な知の諸潮流と生産的な対話を繰り広げながら、新たな知の統合を築き上げていくことなのである。

このようなことをスローガン的に語ることは容易であるが、実際に成し遂げることには大変な困難が伴う。浩瀚な著作を残しているスコラ哲学者たちの著作をラテン語で解読するだけでも大変な労力であり、一人の学者が一生を費やしても足りないほどの作業量を要する。それを踏まえたうえで、他の諸思潮との対話のなかで創造的な思考を展開するためには、人並み外れた知力と体力が必要とされるのである。このような巨大な課題を前にして、その実現可能性を身をもって豊かに示してくれているのが、宮本先生の一連のお仕事だと言えよう。

先生は、二十年あまり前に書かれた或るエッセイのなかで次のように述べている。

> 最早 the theology などはありえないように思える。すなわち、トマスにしても、グレゴリオスにしても、ロースキィにしても、one of the theologies であっ

て、そう眺めるとそれらは逆にロゴスの虹のように輝くアスペクトの一つ一つとしてたとえようもなく美しく見えてくる。……愛智の徒の現状況は、ギリシアの諸哲学、小アジアの諸宗教、東洋の文化、ヘブライの伝統との出会いに立ち会いつつ、それらを一つの織物に織り込むようにしてロゴスの場において観想し生きた初代教会の教父たちの状況と通底するように思われる。……根拠は「今日も働いておられる」(『ヨハネ福音書』5章17節)以上、われわれも既成の「安息日」に安住せず、相異なる楽曲の音を奏でうる一つの楽器の創造を乞い求めつつ歩む以外にはあるまい。それが八日目の光(祝福)への道であろう。(「愛智におもう——総力戦の時代に」、『中世思想研究』第33号、一九九一年、二〇二—二〇四頁)

東西の諸々の古典は、どれだけ優れたものであっても、一つのみで、現代を生きる我々の生を支えうるもの(根拠)とはなりえない。だが、そのことは必ずしも否定的な事態に過ぎないのではない。時代や場所を異にする様々な古典が鮮烈な問題意識のもとに照らし出されるとき、表現されている智慧の形や思想の色合いを異にする多様な古典のテクストの小片が、異質なままに輝き出し、一つの美しい織物を形成し始める、そのような現場に我々は立ち会うことができるのだ。そして、そのような織物が織りなす模様は決して単一なものではない。我々が投げかける問題意識の光の多様性に応じて、現れ出る模様も実に様々なものになる。

先生が展開しているエヒイェロギアは、極めて独自なものでありながら、一個人の頭の中から観念的に作り上げられたようなものではない。実に多様な人類の叡智の小片がちりばめられながら、異質な小片の異質性がそのままに生かされる仕方で一貫した豊かな織物が織りなされている。

先生の極めて現代的な問題意識に照らし出されることによって、中世哲学を中心とした多様な古典の小片が、その新たな可能性を顕在化させ、先生の問題意識の深まりとともに、万華鏡のように多彩な模様を織りなおしていく。少し角度を変えて古典に接するだけで、現れ出てくる模様は鮮やかな変容を遂げていく。古典の小片を読み解いていく日々の地道ないとなみの持続が拓きうる豊かな可能性について、私は、先生のこのような活動から、多大な刺激を受

けるとともに、中世哲学のテクストが織りなすことのできる更に豊かな可能性についての確信をも得ることができた。

ヨーロッパの古典を研究する日本人には、ヨーロッパ人ではないからこそ見えてくるものがあるはずであり、それを生かさずにいるのはもったいないという趣旨のことを、先生は、ことあるごとに語られてきた。手垢のついた解釈にまみれて、現代に語る言葉を失ってしまったかのように見える古典を再読し、東洋の古典からの叡智も織り込みながら、知の万華鏡に新たな模様を浮かび上がらせ、それを国内外に発信し、現代人に活力を与える言葉へと変換しなおしていく。そうしたスリリングな課題の豊かな達成可能性を日々示してくださっている先生のこれからのますますの御活躍を祈念しつつ、小論の結びとしたい。